

視覚障害者のための日本語教育 —サマーコースにおける授業報告と今後の課題—

金山 泰子

[要旨]

ICU の 2003 年夏期日本語教育において、ICU 日本語教育課程で初めてとなる視覚障害者学生を受け入れた。本稿はその概要を報告すると共に、今後視覚障害者学生を受け入れる環境を整えるための課題を提言するものである。

視覚障害者学生を受け入れるにあたり、以下の 3 点が重要と思われる。第一に、教師が視覚障害者学生のバックグラウンドを正確に把握することである。教師は学習者の学習歴とレベル、視覚障害のレベル、学生の使用機器などをできるだけ正確に把握した上で、授業形態（クラス参加型、個別学習型、自習型）と教材の形態（音声化、点字化、電子化）を決定することが必要である。第二に、教師と学内外のスタッフ、ボランティア団体とのネットワークを確立することである。点字学習やコンピュータ学習を促がすために、教師が学内外のスタッフやボランティアサークルと密に連携することが重要だと思われる。第三にクラス運営に関わる人員を増やすことである。視覚障害者学生を受け入れる場合、教材作成や個別授業の設定などにより、多大な時間と労力を要する。よりよいクラス運営を目指すために、教材作成の人材や、教師数を通常より多く配置することが必要だと思われる。

[キーワード]

視覚障害 授業形態 教材作成 ネットワーク

1. はじめに

近年、視覚障害者のための教育環境は次第に整いつつあるとはいえ、外国語教育については研究・事例報告も少なく、未だ開発・改善の余地が多分に残されていると思われる。ICU 日本語教育課程では、2003 年夏期日本語教育（以下サマーコースと呼ぶ）において、初めて視覚障害の学生を 1 名受け入れた。本稿はその学生の在籍したコースの概要を報告するとともに、今後視覚障害者学生を受け入れる環境を整えるための課題を提言するものである。

2. コースの概要

サマーコースでは通常、コース開始前にプレイスメントテストを行い、その結果と学生

の学習歴及び学習目的などを検討した上で適当なクラスに配置するが、今回、視覚障害者学生に対しては学習歴を考慮した上で、中級の初めのレベルにあたるC4のセクションAというコースにプレイスした。このクラスの学生の内訳は、11名（男性6名 女性5名）で、国籍はアメリカ10名（うち台湾系2、中国系1）、韓国1名であった。コースは1日4時間で週5日、6週間にわたり、総学習時間は120時間である。

2-1. コースの目標

このコースでは、①初級コースで勉強したこと（話す、聞く、読む、書く）を毎日の生活の中で使えるようになること、②新しい文法、表現、ことばを勉強し、長い文を読んだり、速く読んだりできるようになること、③他の人の話を聞いたり自分の意見を言ったりすることができるようになることを学習目標とした。基本的に視覚障害学生も健常者学生と同じカリキュラムで、できるかぎり教室活動に参加するものとしたが、教室活動が障害者学生にとって不利であったり、または効果が期待できないと判断される授業（今回の場合は、漢字と速読のクラスがそれにあたる）については個別指導を設定した。またこの他に、日本語点字の基礎をマスターすることを目標とし、点訳サークルの協力のもとに、授業外で日本語点字の学習を行った。

2-2. 教材とスケジュール

視覚障害者学生を受け入れるにあたり、教材をどのように工夫すべきかは非常に重要な問題である。基本的に、できるだけ健常者学生と同じように学習効果が得られるような学習環境を整えることを目標として、学生の既習歴やどのような機器を使って独習をしているか等のバックグラウンドを把握した上で、教材の形態を決定した。コースで使用した教材を以下に示すが、このうち、漢字、速読教材以外のものは全て音声化した。

主教材：「中級から学ぶ日本語」（研究社）

副教材：「どんなときどう使う日本語表現文型200」（アルク）

「Basic Kanji500」（凡人社）

「速読の日本語」（The Japan Times）

ビデオ「続ヤンさんと日本の人々」（国際交流基金）

教師の作成したプリント教材（「中級から学ぶ日本語」の文型シート、読解予習シート、話し合い準備シート、会話プリント、作文の導入プリント）

主教材である「中級から学ぶ日本語」については市販のテープがあったが、学生から速すぎて聞き取れないという指摘があったため、これも教師が音声化した。テープは、遅く

でもクラスで使用する前日までに学生の手元に届くように作成した。コースが進むにつれてテープの本数が増えるので、管理や持ち運びが繁雑にならないよう留意することも大切である。今回は学生と相談の上、テープの片面にテキスト1課分の単語リスト、本文、読解予習シート、文型シート、話し合い準備シートを録音するようにした。その他、「文型200」、会話プリント、作文導入プリントについてはそれぞれ別々のテープを作成した。各テープには点字ラベルのタイトルをつけた。

1週間20コマの内訳は以下のとおりである。

・「中級から学ぶ日本語」(文型・読み・話す・聞く)	10コマ
・文型200	2コマ
・会話	2コマ
・ビデオ・聴解	1コマ
・漢字	1コマ
・速読	1コマ
・作文	1コマ
・プロジェクト(アンケート調査)	1コマ
・テキストのテスト	1コマ
	<hr/>
	20コマ

2-3. 授業形態

前述したように、コースの基本方針としては、出来得る限り視覚障害者学生が健常者学生と共にクラスに参加することを目標とし、漢字と速読の時間以外は全てクラス参加の形をとった。クラスはほぼ通常どおり行われたが、視覚教材(写真、絵、実物など)、板書、ゼスチャーなどが使えないため、教師は状況説明をできるだけ具体的にしたり、インストラクションや例などを意識的に繰り返したりするなどに留意した。漢字と速読のクラスについてはクラス参加が無理だと思われたので、個別指導という形をとった。漢字については、学生がこれまで文字を学習してこなかったという背景があったため、漢字プリントを語彙教材として使用し、教師が語彙を読み上げ、意味を確認し、語彙を使った文を作るなどの学習を行った。速読については、クラスでは、ちらし、メニュー、新聞・雑誌広告、旅行パンフレット、時刻表などの生教材を使って、必要な情報をすばやくキャッチすることを目標として学習したのだが、これらの教材は視覚障害者学生には使えなかったため、その代わりとして「中級から学ぶ日本語」ワークブックの速読教材を使用し、教師が読み上げ、内容を速く正確につかむことを目標に個別指導を行った。これらの個別指導は、総学習時

間120時間のうち9時間である(資料1参照)。

ビデオクラスは、個別にはせずクラス参加型にした。本来、視覚教材は適当でないと思われるが、「続ヤンさんと日本の人々」はストーリー展開、シチュエーション、表現がそれほど複雑なものではないため、ビデオを見る前の導入の段階で教師がある程度の情報を提供するという形で、健常者学生とほぼ同じ条件でクラスに参加した。

2-4. 作文・テスト・クイズ・宿題などの対応

添削、採点すべきものについては、学生と相談の上、以下のような形態で行った。

- ① 作文：ローマ字入力でコンピュータに作文を書かせ、添付ファイルまたはフロッピーの形で提出させ、口頭で添削した。
- ② 「文型200」の宿題：毎回、文型を使った文作りの宿題を課したが、これはコンピュータにローマ字で入力したものを教師がその場でチェックし、口頭で添削した。
- ③ 文型・単語クイズ：教師が設問を読み上げ、学生の答えを記録して採点した。
- ④ テスト：本文を予め教師がテープに吹き込んでおき、何度も繰り返し聞ける状態にしておいた。設問は教師がその場で読み上げ、学生の答えを記録して採点した。

3. ICUの視覚障害学生の受け入れ体制

ICUでは現在、日本語教育課程以外にも4年本科生として視覚障害学生が在籍しており、障害者を受け入れるための教育環境は整いつつあるようだ。現在、ICU図書館に設置されているコンピュータとソフトは以下のとおりである。学生は、個々の学習スタイルやソフトの使用難度などにより使い分けているようだが、インストラクションが難しい、音声読み上げの発音が正確でない、などの問題点も指摘されている。

OS	Windows98 WindowsXP
ソフトウェア	Word, Excel - アンチウイルスソフト - PC-Talker, WinVoice, JAWS (読み上げソフト) - HomePage Reader (音声読み上げブラウザ) - ALTAIR (音声読み上げ、EDITOR、メール、ブラウザなど) - MM メール (音声対応メールソフト) - EXTRA, WinBES (点訳ソフト) - e. Typist (OCR ソフト) - 声の英和・和英辞典, 声の国語辞典

また今回、当該の学生はクラスワークのほかに毎週2回(3週目以降)ICUの点字研究会の学生と共に点字学習を行った。点訳サークルのボランティアとの連携は、視覚障害者学生の教育環境の向上のために欠かせない要素であると思われる。

4. 視覚障害者学生を受け入れるために——反省と今後の課題

以上、コースの概要を報告した。障害者のための教育関係は徐々に整いつつあるとはいえ、問題はまだ多い。今回視覚障害者学生のコースを担当した経験から得た反省をふまえて、今後視覚障害者学生を受け入れる体制を改善するために、今後の課題として考慮すべき点をいくつか挙げたい。

4-1. 学生のバックグラウンドを把握する

学生の視覚障害のレベル、学習歴と学習目的、独習スタイルと使用機器等をできるだけ詳しく正確に把握することは、授業形態やテキストの形態を決定し、学習環境を整える上で非常に重要である。

4-1-1. 視覚障害のレベル

視覚障害のレベル、例えば、明暗、色、形は識別できるのか、先天性の全盲であるのか、後天的なものであるのか、センシティブな問題であるかもしれないが、これらの情報をいかに正確に把握できるかによって、教材の選定、指導方法、授業形態などは変わってくると言える。例えば読解の内容やディスカッションのトピックなどに、「色」の話が出てきた場合、視覚障害者学生に色の概念がなければ、それをトピックとして扱うのは難しくなってくる。とはいえ視覚障害者学生がいることによって教材のバリエーションが限られてしまうこともクラス全体にとって望ましいことではない。たとえば今回、速読のクラスではパンフレット、メニュー等の生教材を使用した。これらは視覚障害者学生にとっては教材として適当ではないと思われたため、個別指導という形態をとった。ここで、視覚障害者学生にとって不適当な教材であるからクラスでも教材を変更するというのであれば、逆に健常者学生にとって不利な学習環境を設定することになってしまうだろう。まずはコース全体の目標に沿って教材を設定した上で、そのコースに視覚障害者学生がどのように関わっていくかを検討すべきであろう。

4-1-2. 学生の学習目的と文字の導入

視覚障害者学生の学習目的の把握には、特に文字学習の必要性の有無が関わってくると思われる。今回の学生は初級の段階で文字は学習していなかった。学習者の目的が基本的なオーラルコミュニケーションであり、本人が特にその必要を認めていない

のであれば文字学習に触れずに済ませることも不可能ではないかもしれない。しかし、学習目的がアカデミックやビジネスにあり、レベルが中級、上級へと進めば、文字を無視して学習することは難しくなってくるであろうし、何より文字を避けることにより、教材が限られ、日本語能力の向上そのものにも限界を作ってしまうことになる。できれば初級の時期に学生の明確な学習目的設定を促がした上で、文字の導入を行うことが望ましいと思われる。ここで言う文字の導入とは、一つは日本語点字の学習であり、今一つは立体コピーを使用するものである。視覚障害者学生の日本語学習において点字学習は大きなウエイトを占めるとと思われる。今回は全面的に点訳サークルの学生に協力を依頼したが、今後、視覚障害者のための日本語教育の将来を考えるにあたっては、日本語教師の中に点字を指導できる人材を育成していくことも重要な課題の一つである。同時に、点訳サークルのようなボランティアの協力は欠かせない貴重な戦力であり、今後も学内学外を問わずボランティア団体との連携を図っていくことが必要と思われる。

4-1-3. 学生の独習スタイルと使用機器

学生がどのような機器を使って独習しているかを把握することも、指導方法や教材を選定する上で重要なことである。ここで「機器」というのは主に、コンピュータソフト、スキャナー（文字から点字または音声に変える）などのことを指す。前述したようにいくつかの機器が開発されており、その利点も欠点もさまざまである。教師は、学生がどの機器を使っているのか、またその機器の利点・欠点は何かを把握しておくことが望ましい。特に、日本語のレベルが中上級と進むにつれて、学生の独習の機会も増え、コンピュータ上での辞書利用がスムーズにできるようになることが必要になってくるため、教師はこれらの利用法を適切に指導しなければならない。しかし日進月歩のこれらの機器の状態を一人の教師が常に把握するのは難しい。そこで望まれるのは、これらのコンピュータソフトの使用法や状況等を正確に把握し管理できる人員が、常に教師・学生と連携を取り合えるようにすることである。学生・教師・コンピュータのエキスパートが互いに情報・意見等を交換することにより、学生のよりよい独習環境を整えていくことが可能となる。

4-2. 授業形態

授業形態は視覚障害者学生の視覚障害のレベルに応じて変わってくる。その形態は概ね、クラス参加型、個別学習型、自習型の三つに分かれる。学生・教師の双方にとって最も望ましいのはクラス参加型であろうが、クラスに参加しても学習効果が得られない場合、教材が不適當な場合には個別指導型に切り替える必要がある。今回のコースでは、

教材の性質と学生の学習歴を考慮に入れて、速読と漢字のクラスのみを個別学習とした。

一般的には視覚障害者学生のビデオ教材使用クラスへの参加は難しいと思われるが、今回の教材「続ヤンさんと日本の人々」はストーリー展開、シチュエーション、表現が比較的わかりやすいものであったので、クラス参加型の形をとった。しかし、ビデオ教材は内容によってはしぐさや表情など言語以外の情報伝達手段が多く使われているものもある。このような教材の場合にはクラス参加する場合は、例えばヘルパーに同席してもらい、かたわらで母語により状況説明をしてもらうなどの方法により、クラス参加が可能になると考えられる。

また、今回自習型という形態はとらなかったが、特に中級から上級にかけて学習者は個々の独習スタイルを確立すべき段階にあると思われるので、課題を与えて自習をするという形もとられてよい。

さらに、中上級における独習スタイルの確立を促すためには、コンピュータ上の辞書利用を適切に指導することが必要であろう。

4-3. 教材の工夫

教材の作成においては、視覚障害者学生の学習歴と現在のレベル、学習目的、視覚障害のレベル(色、明暗、形の識別など)、使用機器(コンピュータソフトの種類、スキャナー、点字など)等を把握した上で、よりよい学習効果の得られる形態を選ぶことが重要である。

4-3-1. 視覚教材

特に初級では絵教材等の視覚教材に頼ることが多い。視覚障害者学生に対してはこれらをほとんど母語で説明することになると思われるが、その中で言葉の意味や概念、イメージを適切に把握できない場合もあるだろう。大内(1996)はこのようなバーバリズム(唯言語主義)の傾向を回避するために、様々な事物・事象を、視覚以外のあらゆる感覚を動員して体験させるような指導を奨励している。単純な例ではあるが、「すし」ということばを言葉で説明するよりも実際に触り食べるという経験を通じて初めて「すし」という言葉の概念ができる。これは健常者学生も同じであるが、ことに視覚障害者学生の指導にあたっては、視覚以外の感覚で経験的に理解させる指導を心がける必要があるだろう。

またビデオ教材を使用する際は、言語以外の情報伝達手段が多い場合は、それを補うための工夫が必要になってくる。既に述べたように、ヘルパーなどに同席してもらうこともその方法の一つである。また、単語リストや状況を説明したプリントを予め音声化したり、スクリプトを音声化する等の工夫も考えられる。

4-3-2. 音声化、点字化、電子化

視覚障害者学習者の教材の形態は、音声（テープ）化、点字化、電子化の3タイプが考えられる。学生の点字学習状況、使用機器に応じて、また、教材作成に要する時間、教員が対応できる時間と方法等によってこの形態は変わってくる。点字化は作成にある程度時間を要するため、初級日本語教育のように使用教科書があらかじめ決定できる場合には可能だが、中上級日本語教育においては教材のタイプも量も多くなり、臨機応変に生教材を使用することが増えるため、難しい。電子化としては、テキストを電子化して画面読み上げソフトに読み上げを行わせるという方法が考えられるが、発音の正確さに欠けるという問題点がある。これらの条件を考え合わせた上で、今回はほとんどの教材を音声化したわけだが、テープに録音するという作業も思いのほか時間のかかるものであった。ことに、市販教材でなくオリジナル教材を使用する場合、コースの進行と共に教材作成も進めていくため、常に録音に追われることになってしまう。教材作成をいかに効率的に行うかは、視覚障害者学生への対応を含めてコースを運営する上で、最大の課題と言えよう。

5. 終わりに

今回視覚障害者学生を受け入れたことは、筆者個人にとっても、ICU日本語教育課程の門戸をより広く開くためにも、またひいては日本語教育の将来を考える上でも、非常に意義深く貴重な経験であったと思う。今回の経験と反省をふまえて、今後視覚障害者学生を受け入れるにあたり見直すべき点について指摘したい。

一言で言うなら、視覚障害者学生の学習環境を改善するためには、より多くの人々が関わることが必要になってくるということである。たとえばクラス参加型の授業が不可能な場合、個別授業に対応する教員が必要になる。また視覚障害者学生のための教材作成は、量的にも時間的にも、膨大なエネルギーを要する。視覚障害者学生への対応も含め、コース全体の運営を効果的に行うためには、教材作成の人員も必要であり、コースを担当する教員数も通常の1.5～2倍の配置が必要になってくる。

さらに、必要な人員を確保することと同様に重要なことは、学内外スタッフやボランティア団体との連携である。点字学習やコンピュータの使用など、視覚障害者がクラス外で学習するための学内学外環境を整えるために、図書館、ILC、点訳サークル、ボランティアの方々の協力は不可欠である。こういった方々と教師とがお互いに密に連携を取り合い、情報交換ができる確かなネットワークを構築することの重要性を痛感した。

以上、コースの概要と今後の課題について述べた。今回の経験が、今後視覚障害者学生を受け入れるための学習環境の改善に繋がることを願っている。

資料1

第1週

		7/7 (月)	7/8 (火)	7/9 (水)	7/10 (木)	7/11 (金)
1	8:30		ラボオリエンテ	文型200	L1「たどえる」読解	文型200
	9:20		ーション	L1 時間関係	STQ/VQ	L1 時間関係
2	9:30		作文	会話1	L1「たどえる」	会話2
	10:20		面接	サマーコースの抱負	読解	レストラン
3	10:40		コース説明	速読1	L1「たどえる」	漢字1
	11:30			メニュー	話し合い	
4	11:40		自己紹介	L1「たどえる」	L1「たどえる」	作文1
	12:30			文型	聴解	ワープロ入力

第2週

		7/14 (月)	7/15 (火)	7/16 (水)	7/17 (木)	7/18 (金)
1	8:30	会話3 電話	L2「つたえる」読解	文型200	L3「はたらく」読解	文型200
	9:20		STQ/VQ	L7 依頼・命令	STQ/VQ	L20 敬意
2	9:30	テキスト文型	L2「つたえる」	会話4	L3「はたらく」読解	会話5
	10:20	L2「つたえる」	読解	頼む・断る		お見合い
3	10:40	多摩大学交流会	L2「つたえる」	プロジェクト1	L3「はたらく」	漢字2
	11:30		話し合い	説明	話し合い	
4	11:40	多摩大学交流会	L2「つたえる」	L3「はたらく」	L3「はたらく」	作文2
	12:30		聴解	文型	聴解	手紙

第3週

		7/21 (月)	7/22 (火)	7/23 (水)	7/24 (木)	7/25 (金)
1	8:30	テスト1	L4「あきれる」読解	文型200	L5「食べる」読	文型200
	9:20	(テキストL2,3)	STQ/VQ	L16 条件	解	L16 条件
2	9:30	KQ	L4「あきれる」読解	会話6 病気	L5「食べる」読	会話7
	10:20	ビデオ1 続ヤンさん			解	道を聞く・教える
3	10:40	プロジェクト2	L4「あきれる」	速読2	L5「食べる」	漢字3
	11:30	テーマ発表	話し合い	旅行・時刻表	話し合い	
4	11:40	L4「あきれる」	L4「あきれる」	L5「食べる」	L5「食べる」	作文3
	12:30	文型	聴解	文型	聴解	日本 VS 私の国

第4週

		7/28 (月)	7/29 (火)	7/30 (水)	7/31 (木)	8/1 (金)
1	8:30	テスト1	L8 「かざる」	文型200	L9 「あらわす」	校外学習 江戸東京博物館見 学
	9:20	(テキストL4,5)	読解 STQ/VQ	L4-1 原因・理由	読解 STQ/VQ	
2	9:30	KQ	L8 「かざる」	会話8	L9 「あらわす」	
	10:20	ビデオ2 続ヤンさん L19	読解	日本人学生と話 す	読解	
3	10:40	プロジェクト3	L8 「かざる」	速読3	L9 「あらわす」	
	11:30	中間発表	話し合い	テレビ番組	話し合い	
4	11:40	L8 「かざる」	L8 「かざる」	L9 「あらわす」	L9 「あらわす」	
	12:30	文型	聴解	文型	聴解	


第5週

		8/4 (月)	8/5 (火)	8/6 (水)	8/7 (木)	8/8 (金)
1	8:30	テスト3	L11 「いきる」	文型200	L11 「こまる」	文型200
	9:20	(テキストL8,9)	読解 STQ/VQ	L18 使役	読解 STQ/VQ	L19 受身
2	9:30	KQ	L11 「いきる」	会話9	L11 「こまる」	会話10
	10:20	ビデオ3 続ヤンさん L25	読解	日本人学生と話 す	読解	発表の表現
3	10:40	校外学習	L11 「いきる」	速読4 情報誌	L11 「こまる」	漢字4
	11:30	レポート	話し合い		話し合い	
4	11:40	L10 「いきる」	L11 「いきる」	L11 「こまる」	L11 「こまる」	作文4
	12:30	文型	聴解	文型	聴解	意見文

第6週

		8/11 (月)	8/12 (火)	8/13(水)	8/14 (木)	8/15 (金)	8/16(土)
1	8:30	テスト4	テスト	テスト	プロジェク	面白い話を	クイズ大会
	9:20	(テキスト L10,11)	(速読)	(RP・インタビュ ー)	ト 発表	読む	
2	9:30	KQ	テスト	テスト	プロジェク	悲しい話を	クイズ大会
	10:20	ビデオ4 続ヤンさん L26	(聴解・漢 字)	(RP・インタビュ ー)	ト 発表	読む	

3	10:40 11:30	漢字5 	テスト (作文)	プロジェクト準備	プロジェクト 発表	俳句・川柳を 作ろう	歌の練習 「大きな古時計」
4	11:40 12:30	会話11 別れのあいさつ	テスト (作文)	プロジェクト準備	プロジェクト 発表	歌の練習 「大きな古時計」	修了書配布

- * STQ →structure quiz
- * VQ →vocabulary quiz
- * KQ →kanji quiz
- *  →視覚障害者学生のための個別授業

参考文献

- 大内進 (1996) 『視覚障害教育に携わる方のために』 香川邦生編 慶応義塾大学出版会 78-81
- 青木惣一 (2002) 「2001-2002年度年間カリキュラム報告」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター紀要』 25号 アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター